

## 教育関係の活動の思い出

鹿児島大学名誉教授 長岡英一

1982年の赴任時、新設校なのに実習室にマネキンがなく、授業時間数が少ないこと（前任校の約7割）に驚いた。1期生の基礎実習は夜遅くまでかかった。「実習も時間内に収めるべき」、「まだ専門学校みたいなことをやっているのか」といった批判が耳に入ってきた。以来、教育の質的向上が私の中で至上命令となり、その実現のための予算を粘り強く要求し続けた。十数年後にやっと概算要求（1995、1996）で基礎実習の設備（マネキン、高速切削、視聴覚）、学内予算で臨床予備実習のマネキンが入り、臨床手技のシミュレーション実習が可能となり、2002年9月第1回OSCEトライアル実施（責任者）を経て2005年共用試験本格実施に至った時、OSCE実施に円滑な対応ができた。

もう一つ、驚いたことがある。九州にこんなに歯学部は不要として、つぶされる候補に本学が入っていた。夢を膨らませて赴任してまだ間もないころである。そして、忘れることができないのは、10周年記念事業（1987年10月）における講演を依頼した当時の文部省高等教育局医学教育課長の懇談会席上（そのように記憶）での発言である。それは「鹿児島大学のようなところでは研究よりも教育をしっかりと」（複数の他大学名を挙げての比較であったがその大学名は伏す）という趣旨であった。このような見解が文部省内にあることを知るとともに、悔しい思いをした。講演内容の冊子「歯学教育の現状と将来への展望」が作成されている（1988年3月）。臨床実習の観点から患者数の少なさが指摘されるとともに、すでに10数年後の国立大学法人化や大学評価（自己評価）のことが述べられており、示唆に富むものであった。

その後、1995年に教育委員会内にカリキュラム部会・共通教育部会と共に設置された臨床教育部会の部会長として「1998年度臨床実習実施方法」について検討して、中間報告書・最終報告書を作成・提示し、新プログラムによる臨床実習開始に漕ぎ着けた。

有床義歯補綴の臨床実習では、一期生以来、愚直に続けてきた患者配当による診療参加型臨床実習（手技習得だけでなく患者の不安や喜びにも接することがで

きる）に加えて、症例発表（他の臨床例を知ることができる）・症例論文（A4版見開き2頁）を課した。

2009年度、文部科学省のヒアリングにおいて本学の診療参加型臨床実習に対する厳しい指摘を受けたことは残念であったが、個人的には新分野（歯科医学教育実践学）設置と教授選考に寄与できたことは嬉しいことであった。

現役最後の2補綴OB会会報第12号の挨拶文において、大学の機能分化について触れた。平成17年の中教審「将来像答申」では大学が有する機能は七つに大別されている。鹿児島大学に対してはどのような見解があるのだろうか？個人的には地域社会における貢献が重要な課題と考えていた。

歯学部の益々の発展を祈念申し上げます。